ＯＤＧ Original Dynamic Generation

蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＯＤＧ　Ｏｒｉｇｉｎａｌ　Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ

【Ｎコード】

Ｎ２５７２Ｕ

【作者名】

蛇

【あらすじ】

今地球は狙われていた・・・・地球を守るため、立ち上がった戦士達。これは彼等が紡ぐ物語

第1話　始動、マジンガーＺ（前書き）

できましたー

第1話　始動、マジンガーZ

大門市　兜家
「親父、行ってくる」
父、兜　甲児の仏壇へと手を合わせ息子、兜　力也は学校へとむかった

「（親父が死んで、もう5年か・・・・）」
甲児は世界にその名を轟かす天才発明家だった。彼のおかげで人類はさらに豊かになり、問題となっていた環境破壊も彼のおかげで解決した。まさに甲児は救いの神のような存在だった。そんな父を力也はとても尊敬していた
だが5年前、甲児は死んだ。死因は不明。母であるさやかはなにかを知っていたようだが誰にも教えなかった。息子である力也にもだ

「おっはよー！力也」
力也の背中に誰かがおぶさってきた

「なんだ美香か」
おぶさってきたのは力也の幼なじみ、剣　美香である

「なんだとはなんだよー。こんな可愛い幼なじみがおぶさってきたんだぞ～？もっと嬉しそうなリアクションをしろよ～」

「悪いな。俺はお前が可愛いとは一度も思ったことがないんだよ。っつーか、さっさとどけ」
しかし美香は背中におぶさったまま。むしろさらに密着してきた

「可愛いって言ってくれるまでどかな～い」

「ああそうかい。じゃあずっとそうしてろ」
そのまま歩きだす力也。そんな状態で歩いていればいやでも注目されるはずだが、誰も注目はしていない。むしろ、「ああまたか」といった感じである。その様子から今日だけではなく何回もこのやりとりをやっているようだ

「あいかわらず仲がいいなお前ら」
そんな二人に一人の男が話し掛けてきた

「あ、宙先輩。おはようございます」
力也が話し掛けてきた男に挨拶する

「おうおはよう」
話し掛けてきたのは二人の一つ上の先輩、司馬　宙である

「別に仲がいいわけじゃないですよ。ただの腐れ縁です」

「腐れ縁とはなにさ」
そういいながら力也の頭をぺちぺちと叩く美香

「充分、仲がいいと思うがな。まっ、ほどほどにしとけよ」
そう言って宙は歩いていった

「なにがほどほどになんだ？」

「ほらほら、早くしないと遅刻しちゃうよ～」

「だったら降りろよ。ったく」
ぶつくさ言いながらも美香を背負いながら学校へと向かう力也であ

った

大門高校　２－Ｂ教室

「よう力也」

「ん？ああ竜馬か」

美香と別れ自分のクラスについた力也に話し掛けてきたのは友人の流　竜馬である

「今日も美香ちゃんと登校してきたんだな」

「家が近いから、しかたなく一緒に登校してるんだよ」

「家が近いからって一緒に登校はしないと思うけどな。まあいいや。今日放課後暇か？」

「わるいな。今日はまっすぐ帰ってくるように言われてんだ」

「そうか。じゃあ仕方ねぇな。隼人と弁慶でもさそうか」

「（二人とも部活だと思うがな）わるいな」

あえて言わない力也
そのとき教室のドアが開き担任の先生が入ってきた
「ほら席につけ。ＨＲ始めるぞ」
今日の授業が始まった

時は過ぎ放課後
家に帰ってきた力也
「おかえり力也」
帰宅した力也をさやかが出迎える
「ただいま母さん。で、話したいことってなにさ？」
「・・・・ついてきなさい」
そう言うとさやかは甲児の部屋へと入っていく
甲児の部屋に入ったさやかは本棚の本に触れる。すると本棚が動き
地下への階段が姿を表す
「これは・・・・」
こんなものがあったことに驚いている力也

「早くきなさい」
階段をおりていくさやかとそれについていく力也
しばらくするとなにやら広い部屋にでた
部屋の中は暗くなにも見えない

「なんだここ？」
さやかが明かりをつける。まず目に入ったのは巨大な赤い飛行機。
そしてたくさんの機械類である

「よく見ておきなさい」
さやかがモニターのスイッチをいれる

『力也、私の息子よ。お前がこれを見ているとき私はすでに死んでいるだろう』
モニターには甲児が映し出される

『いまから話すことはすべて真実だ。よく聞くように。あれは私が衛星を打ち上げたときのことだ。その衛星から驚くべき映像が送られてきた。それは見たことのない生命体だった。それは自らのことをマザーゴルーグと名乗っていた。そしてそのマザーゴルーグはゆっくりとだが地球に近づいていることがわかった。そこで私はいまから宇宙にむかい、マザーゴルーグが地球に仇をなす存在かを調べてくる。そしてもしマザーゴルーグが地球に仇をなす存在だったときのためにこれを残しておく』
モニターに巨大なロボットの姿が映し出される

『このロボットの名はマジンガーZ。力也、お前がこれに乗ってやつと戦ってくれ』

「な！」

『動かしかたはお前が寝ている間に頭の中にたたき込んでおいた。そこのホバーパイルダーに乗ればすべて思い出すはずだ。頼んだぞ力也』
そこで映像は終わった

「・・・・母さん。これって」

「すべて本当のことよ。父さんは宇宙へとむかった。しかしマザーゴルーグによって死体となって帰ってきた。そしてそのマザーゴルーグは今、月の裏側にいる。自らの子供に地球を襲わせるためにね」

「・・・・・」
絶句。言葉がでない力也
そのとき地鳴りのような音がした

「どうやら現れたようね」
さやかはあくまで冷静である

「いくのよ力也。あなたがやつらを倒すの」

「そ、そんなこと急に言われても」

「これはあなたにしかできないことなの。父さんの、甲児くんの意思をあなたがつぐのよ」

「俺が、親父の意思をつぐ・・・・・俺にできるのか?」

「できるかできないかじゃない。やるのよ」「・・・・・」
考え込む力也

「力也！」

そのころの地上
三体のゴルーグが暴れ回っていた
どれも虫のような姿をしているがどこか機械のような部分を感じる
自衛隊が応戦しているがまったく歯が立たないようだ
そのとき兜家の地下から一機の飛行機がでてきた

「親父。俺にどこまでできるかはわからない・・・・けど！俺は守ってみせる。親父が守りたかったこの地球を！マジィィィン、ゴォォォォォォ！」
兜家の庭のプールが二つに割れ地下からマジンガーZが上がってくる

「パイルダァァァァオォォォォン！」
ホバーパイルダーの翼がたたまれマジンガーZの頭にドッキングする
マジンガーZの瞳に光が宿る
マジンガーZに気づいたゴルーグの一体が向かってくる

「うぉぉぉぉ！ロケットォォォパァァァァンチ！」
マジンガーZが拳を、向かってくるゴルーグにむけ発射する
拳はゴルーグの胴体を貫き胴体に穴が開いたゴルーグは爆発する

「うぉぉぉぉ！アイアンカッタァァァァ！」
戻ってきた拳から刃を出現させそのままゴルーグの一体へと向かう

「やぁぁぁぁ！」
そのままジャンプしチョップの要領でたたき付ける
ゴルーグは真っ二つに裂け爆発

『キシャァァァ！』
最後の一体が鎌を構えマジンガーへと突っ込んでくる

「はぁぁぁぁ！ブレストォォファイヤァァァァァァァァ！！！！」
マジンガーの胸の放熱板から熱線が放たれゴルーグを包み込む。ゴルーグはドロドロに溶け爆発した
煙が立ち上る中マジンガーは悠然と立っている

「親父・・・・見ていてくれよ」
力也は一人呟いた

第1話　始動、マジンガーZ（後書き）

父の意思を継ぎ戦うことを決心した力也。そんな中新たな悪が地球へと迫っていた
やつらの名はホラー帝国
その存在をしった流博士は自分の息子とその友人二人に未来を託す
次回『ゲッターロボ出撃』

第2話　ゲッターロボ出撃（前書き）

二話でございます

第2話　ゲッターロボ出撃

とある宇宙船

「これが地球か・・・・素晴らしいな」
異様な姿をした男がモニターに映る地球を見ながらそう呟いた

「ホラー様、宇宙獣の準備が終わりました」
これまた異様な姿をした男が部屋に入ってきた

「そうか・・・・では、キュラ！」
ホラーが叫ぶと黒い服に身を包んだ、悪魔のような翼が生えた男が現れる

「漆黒のキュラ、ただいま参上しました」

「キュラよＤｒフランケンの作りし宇宙獣と共に地球にいき地球を侵略してくるのだ」

「イエスホラー！」

地球
さやかがゴルーグの存在を発表したことにより、世界中で戦闘ロボットの開発が行われていた。そんな中、日本はさやかにマジンガーZを引き渡すようにいったが、さやかはマジンガーは甲児から力也に受け継がれた物だから渡すことはできないと、これを拒否した
そんなマジンガーZのパイロット、力也はというと

「おっはよう力也！」

「ん？ああ美香か」
学校に行っていた
マジンガーのことは日本中に知れ渡っている。もちろんパイロットである力也のこともだ
そんな状況で学校に通えばどうなるか。注目の的である。そんな状況で話し掛けられる美香は勇者といってもいいだろう

「ニュース見たよ～。すごいね力也」

「別にすごくなんかねーよ。俺はやれることをやっただけだ」

「それでもすごいことには変わりないよ。私なら絶対逃げ出しちゃうもん」

「まあ、お前なら逃げ出すだろうな」
そんな話をしているうちに学校に到着する二人
力也は自分の教室に入りあることに気づいた

「竜馬がいない？」
教室に流　竜馬の姿がない。竜馬は不良ではあるが遅刻はしない、ずる休みはしないなど変なところで真面目な男である。普段ならこ

の時間には登校しているはずなのである

「風邪・・・・は無いな」

竜馬は生まれてから一度も病気にかかったことがないらしく馬鹿は風邪を引かないを証明している男である。そんな竜馬がいまさら風邪はない

「なんでだ？」

流天文台

「ハァァァックション！」

「なんだ風邪か竜馬」

「おいおい隼人。竜馬が風邪引くわけないだろ？」

「ちがいねぇな」

「隼人、弁慶、お前ら俺を馬鹿にしてんのか」

突然クシャミをした竜馬をからかうのはサッカー部キャプテン、神隼人と柔道部主将、車　弁慶。二人とも竜馬とは幼少のころからの付き合いである

「ったく。で、ジジイ。早く話したらどうなんだ？俺達を学校を休ませてまで話したかった話とやらをよ」
竜馬は目の前に座る一人の老人を睨みつける。彼こそは竜馬の保護者であり天文学者、流　善三である

「・・・・先日、町に現れた怪物はしっておるな」

「力也が倒した怪物だろ。たしか・・・・ゴールドだっけか？」

「ゴルーグだ。で、博士。そいつがどうかしたんですか？」
隼人は善三のことを学者として尊敬しているため博士と呼んでいる

「地球を狙うものはやつらだけではない」

「は？なに言ってんだジジイ。ついにボケたか？」

「真面目な話じゃ。静かに聞け」

「な、なんだよ」
いつもと様子が違う善三に竜馬は戸惑う

「地球は今様々な敵に狙われておるのじゃ。そしてわしはその敵達に対抗するためにあるものを作った」
善三は座っている椅子についているボタンを押す。すると・・・・

「うぉぉぉぉ！？」
三人の座っている椅子の下に穴があき椅子といっしょに下へと落ちていく

「いたっ！」
しばらくするとなにかの操縦席に落ちる
『全員ついたようじゃな』
目の前の画面に善三の姿が映し出される
「ジジイ！どういうつもりだ！」
『まずは足元にあるヘルメットを被れ。話はそれからだ』
しぶしぶ被る竜馬、素直に被る隼人、不安げに被る弁慶
三人がそれぞれ被ると三人の頭の中に様々な情報が流れ込んできた
「な、なんだ！？」
「ぐぅぅぅ・・・・・」
「あ、頭が・・・・・」
『ふむ終わったようじゃな。では、改めて説明するとしよう。お前らが乗っているのはゲットマシンという戦闘機での、それぞれファイヤー号、ハリケーン号、マウンテン号という。この三機は合体することでゲッターロボというスーパーロボットとなる。合体には３パターンがあってな、それぞれゲッター炎、ゲッター嵐、ゲッター山という。それぞれメインパイロットも変わるからな、気をつけろ。ちなみに今頭の中に流し込んだのはゲットマシンとそれぞれのゲッターの動かし方じゃ。実践でいかすように』
「なに言ってんのかさっぱりわかんねえっつうの。いててててて」
『つまりは、ゲッターで敵と戦え。ということだ』

「な！」

「俺達が・・・・」

「戦う・・・・」

善三の言葉に驚きを隠せない三人。その時だ

ビービービー

辺りにサイレンが鳴り響く

「な、なんだ！？」

『どうやら現れたようじゃな・・・・』

その頃の地上

『オォーン』

一つ目の怪物が暴れ回っている

「ふむ、さすがは宇宙獣。中々のパワーだ」

少し離れたところにはジャックランタンのような戦艦が浮いている

「よし、そのまま破壊を続けろＡ・アスタング！」

流天文台

『時間がないな・・・・ゲットマシン発進せよ！』

善三の声とともにゲットマシンが地下から上へと上っていく

各ゲットマシンがそれぞれ定位置につくとそれぞれのゲットマシンの目の前の扉が開き発進口が現れる
カタパルトを滑りゲットマシンが発進する
「「「う、うぉぉぉ！？」」」
いきなり発進したためマシンに振り回されている三人
「な、なんだあいつ！」
しばらく飛ぶと暴れている怪物が目に入る
「ゴルーグとは違うみたいだな・・・・うぉ！」
アスタングの目から光線が放たれ隼人のハリケーン号に当たってしまう
「隼人！このやろう、よくも隼人を！」
竜馬はファイヤー号についているバルカン砲を乱射する
アスタングは一瞬ひるむが今度はファイヤー号にむけて光線を放つ
「当たってやるかよ！」
光線をかわす竜馬
『お前達何をやっている！とっとと合体せんか！』
「合体すれば勝てんだな？よっしゃあいくぞ隼人！弁慶！」
「くっ、わかった」
「いけ！竜馬！」
「チェェェェェンジ、ゲッタァァァァァァァェェェェェン！」

ファイヤー号、ハリケーン号、マウンテン号の順番にゲットマシンが合体していき一体の赤いロボットになる

「これが・・・・・ゲッターロボ」

「よし竜馬！いままでのお返しだ、おもいっきりやってやれ！」

「おうよ！ゲッタァァァァトマホォォォォク！」
肩から片刃の斧、ゲッタートマホークが飛び出す。ゲッターはそれを握りしめアスタングへと飛び掛かる

「なんだあれは？地球の兵器か？ならばアスタング！やつを捻り潰してやれ！」
キュラの命令でアスタングは腕を剣へと変え、ゲッタートマホークを止めるために構える

「オラァァァ！」

『ギャァァァ！』
ゲッタートマホークとアスタングの剣がぶつかり合う。ゲッターが押し切りアスタングの腕を切り裂く

「次は俺にやらせろ！」

「おうよ。やってやれ隼人！オープンゲット！」
ゲッター炎が再び三機のゲットマシンへと分離する

「チェンジ！ゲッタァァァァ嵐ぃ！」
ハリケーン号、マウンテン号、ファイヤー号の順に合体し大きなドリルが特徴的な白いロボットになる

「うぉぉぉぉ！ゲッターハリケェェェェン！」
嵐の両肩に取り付けられているプロペラが高速回転し竜巻を発生させる
竜巻はアスタングを巻き込み上空へと吹き飛ばす

「弁慶、次はお前がやってやれ！オープンゲット！」

「よーし、チェンジ、ゲッター山！」
分離した三機がマウンテン号、ファイヤー号、ハリケーン号の順に合体していきキャノン砲を装備し足がタンクになっている黄色いロボットになる

「全弾くらえ。ミサイルストォォォォム！」
ゲッターのタンクから大量のミサイルが放たれ空中にいるアスタングに命中する

「竜馬！とどめをさしてやれ！」

「おうよ！チェェェェンジゲッタァァァァァ炎！」
分離し再び炎へと合体する

「こいつでとどめだ！ゲッタァァァァビィィィィム！」
炎の頭部から緑色の光線が放たれる。光線はアスタングに直撃しアスタングは爆発する

「ば、馬鹿な・・・・宇宙獣があっさりと・・・・・。急いでホラー様に報告せねば！」
キュラを乗せた戦艦は猛スピードで飛んでいく

「あ、あいつ逃げていくぞ」
「へっ、逃がすかよ！・・・・・あれ？」
レバーを引いたり押したりするがゲッターは動かない
「どうやら燃料ぎれみたいだな」
「なに！じゃあどうするんだよ！」
『まったくお前達は・・・・・右下の緑色のボタンを押せ』
画面に現れた善三が竜馬に指示をだす
「緑色のボタン？これか」
竜馬がボタンを押すとゲッターが緑色に輝きだす
「な、なんだ！？」
『ゲッターロボのエネルギーであるゲッター線をチャージしておる。しばらく待て』
「ゲッター線？聞いたことのないエネルギーだな」
『あたりまえじゃ。わしが見つけたエネルギーじゃからな』
「博士が見つけたんですか！？」
『そうじゃ、わしが・・・・・む？』
「博士？どうかしまし」
その時なにかが落ちてきた

「こいつら、ゴルーグじゃねぇか！」

「一匹、妙にでかいのがいるな・・・・」
ゴルーグの集団に一匹だけ巨大なのがいる

「へっ！ちょうどチャージも終わったところだ。いっきに叩き潰してやるぜ！」
肩からトマホークを取り出し構える

「ロケットパンチ！」
ゲッターの後ろから黒い拳が飛んでいき一体のゴルーグの胴体を貫く

「あん？力也か？」

「その声・・・・竜馬か！？学校にいないと思ったらなんでそんなところに？」

「説明は後だ！とっととこいつらぶっ倒すぞ！」

「お、おう！」
ゲッターとマジンガーはそれぞれゴルーグへとむかっていく

「うらぁぁぁぁ！」

「うぉぉぉぉ！」
二体はゴルーグ達を順調に倒していき残りは巨大なゴルーグ一匹となる

「さて、残るはこいつだけだな」

「へっ！こいつでぶっ倒してやるぜ。ゲッタァァァビィィィム！」
頭部から放たれたビームは巨大なゴルーグに当たるが
「な！効いてない！？」
「いや、効いてはいるがくらったそばから再生しているみたいだな」
「いままでのがポーンだとしたらビショップぐらいか？なら・・・・・」
力也はあるボタンを押す。するとダイヤルとメーターが出現する
「うぉぉぉぉ！光子力ビィィィィム！」
マジンガーの目から放たれた黄色の光線が巨大ゴルーグに直撃する
「うぉぉぉぉ！」
巨大ゴルーグの体がボロボロにくずれさっていき完全に消滅する
「すっげぇ威力だな・・・・・」
「ふぅ・・・・で、竜馬。なんでそんなロボットに乗ってるんだよ」
「え？ああジジイに無理矢理乗せられたんだよ。くそ」
「まあいいや。母さんが読んでるんだ。そのロボットに関係している人全員連れてこいってさ」
「となるとジジイもか。めんどくせぇな」

第2話　ゲッターロボ出撃（後書き）

出会うは二人の博士。そして善三はある真実を語りだす
そしてある神社の息子が発見した『魔竜』
物語は確実に動き出している
次回『炎の巨人　ガイキング』

第3話炎の巨人　ガイキング（前書き）

第三話です

第3話炎の巨人　ガイキング

魔竜神社
大門市にある、伝説の魔竜が眠っているとされる神社

「１９７！１９８！１９９！」
その境内で箒をバットがわりにスイングをしている青年が一人
彼の名は空竜宮（くうりゅうノみや）　海地（かいじ）この神社の跡取りなのだが彼本人は野球選手を目指していたりする

「２００！「くらぁ！なにしとるか海地！」げっ！じいちゃん！」
本堂からでてきたのは空竜宮　源三

「野球の練習ならいつでもできるじゃろうが！今は掃除をせい！」
海地が野球好きになったのはこの源三のせいである。なので源三は海地が野球をするのは反対ではないのだ。ただ野球ばかりせずに神社の手伝いもしろと言っているだけである

「わかったって。・・・・ん？」

「また地震のようじゃな」
最近魔竜神社周辺で地震が多くなっている

「いやだな～。なんか変なことでもおこるんじゃねえかな。なあじいちゃん」

「・・・・・・・」

「じいちゃん？」

「あ、ああそうじゃな。ほれ、そんなことはいいからとっとと掃除をせい」

「？うん」

頭にクエスチョンマークを浮かべながらはき掃除を始める海地

「・・・・・・時はきたか」

源三の呟きは誰にも聞こえることはなかった

兜家　研究室

兜さやかと流善三の二人が向かい合わせに座っている。近くには力也と竜馬、隼人に弁慶もいる

「・・・・・もう一度、言ってもらえませんか」

「何度でも言おう。すべての原因を作ったのは、兜　甲児じゃ」

「父さんがすべての原因・・・・」

善三の言葉にショックをかくせない力也

「おいじじい。適当なことを言ってごまかすつもりじゃないだろう

な」

「適当などではない。兜　甲児は人類の進化を進めると同時に破滅の運命も進めてしまったのじゃ」

「・・・・・どういうことだよ」

「ゴルーグも先程の怪物も甲児の研究が呼び寄せてしまったものじゃ。それだけでは「違う」む？」

「あの人は、甲児くんは平和のために研究を続けていた。あんな化け物を呼び寄せるためなんかじゃない！」
怒りの感情をあらわにするさやか

「そんなことは百も承知じゃ」

「じゃあ！」

「やつとしても予想外じゃったのじゃろう。かねてから研究していたマジンガーを急いで完成させ、そして対話ができないかと宇宙へと旅だった。結局、殺されてしまったがな」

「・・・・・・」

「あの、さっきから気になってたんですが」
隼人が唐突に口を開く

「なんじゃ？」

「いえ、なんで兜博士のことをそこまで知っているのかと・・・・」

「・・・・・まあ、研究者どうしのつながりだとでも思ってくれ」

「は、はあ」

「とにかくじゃ、地球を狙うもの達への対策のためにも戦力を増やすべきじゃ」

「だが今のところマジンガーとゲッターだけじゃねえか」

「安心しろ、あてはある」

善三は神社の方向をみながらそう言った。ときだった

ゴゴゴゴゴ

「地震？」

「でけえぞ、これ！」

突如大門市を大きな地震が襲う

外が暗くなり空に大きな炎が浮かび上が

「フハハハハ！ついに、ついに！封印がとけた！地上人よ、今度こそ根絶やしにしてくれる！現れよ、地底獣　アントグラー！」

地面に巨大な魔法陣が現れそこから蟻のような怪物が現れた

「おいおい、なんだよあれ」

「こうしちゃいられねえ。急いで出撃するぞ！」

竜馬が研究所をでようとするが善三に止められる

「じじい！なにしやがんだ！」

「まあ、待て。やつにはふさわしい相手がいる」

再び神社のある方向を見る善三

魔竜神社

海地は地震でできた割れ目に落ちていた

そこで彼はある物を見つけた

「なんだよ・・・・・これ・・・・・」

彼が見たもの、それは巨大な機械の竜だった

「これは魔竜じゃ」

「じいちゃん！？」

源三がどこからか入ってきた

「いいかよく聞け。お前は戦う運命にある。この魔竜と共に戦う運命が」

「な、なにいってんだよ・・・・戦う運命って」

「乗れ」

「え？」

「あの魔竜に乗れと言っとるのだ」

「な！」

「そして戦え。炎の巨人とともに」

「む、無理に決まってるだろ！それに戦いなんてマジンガーとかいうロボットに任せれば「お前にしかできないのだ。あの悪魔と戦うのは」・・・・悪魔？」

「そうだ。地底の悪魔に勝てるのは正しき炎の力をもつお前だけなのだ」

「正しき炎の力？」

「頼む。世界のためにも戦っとくれ」

「そんなこと言われてもよ・・・・」

魔竜を見上げる海地

すると魔竜の首が動き海地をくわえ、上にむけて放り投げる

「な、なんだぁぁぁぁぁぁ！」

そのまま魔竜の顔の中に落ちる。落ちた場所はコクピットのような場所だった

「いてて・・・・なんだここ？」

考えていると目の前のモニターに文字が浮かび上がる

「なんだ？大空・・・・魔竜？発進ってなんだ？」
海地がモニターにでた文字を読み上げると魔竜が待ってましたとばかりに浮上を始め、地上へと飛び出す

「うおっ！」
地上に出たことなど知らない海地はいきなり目の前に現れた蟻の化け物に驚く

［むぅ！？あれは忌まわしき大空魔竜ではないか！アントグラーよ、そいつを叩き壊すのだ！」
破壊活動を行っていたアントグラーは破壊目標を魔竜へとむける

「うわっ！こっちきやがった！」
するとモニターに違う文字が浮かび上がる

「へ？アームパーツ、レッグパーツ、ゴー？」
すると大空魔竜の腹部にあるハッチが開きそこから2機の飛行物が飛び出す
飛行物はアントグラーに体当たりする。ふとモニターを見ればまた違う文字が浮かんでいる

「フェ、フェイスパーツ、ゴー」
嫌な予感がしつつもなぜか読み上げる海地
案の定、海地の乗っている魔竜の頭部が外れ、飛び出す

「フォ、フォーメーションガイキング！」
そんな状態でも律儀に文字を読み上げる海地
先に発射されていた2機のパーツが変形しアーム、フェイス、レッ

グの順に縦に並ぶ

「コンバイィィィィン！」

もうやけくそだといった感じで文字を読み上げる海地。そして合体を始めるパーツ達

そしてマジンガーやゲッターよりも巨大な巨人、二本の角と胴体の顔が特徴的な巨人、ガイキングが地上に降り立った

［ガイキングまで現れるとは・・・・ええい！アントグラー！さっさとそいつらを倒せ！］

アントグラーがガイキングにむかってくる

「あわわわわ。ど、どうすれば・・・・」

『困っているようだな』

「だ、だれだ！」

突如コクピット内に声が響く

『俺の名は大空魔竜。不安しかないお前に戦い方を教えてやろう』

「大空魔竜？ってあの魔竜のことじゃ・・・・」

『その大空魔竜だ。ほら敵がきてるぞ』

「うおっ！」

アントグラーの体当たりにより倒れるガイキング

「くっ・・・・うわっ！」

立ち上がろうとする前にアントグラーにのしかかられてしまう

『はあ、言ったそばからこれか。いいかガイキングはお前の思い描いたとおりに動く。まずはそいつをどかし立ち上がることを考えろ』

「どかして・・・・立ち上がる！」
ガイキングは念じたとおりに動きアントグラーを蹴りでどかし立ち上がる

『次だ。拳を地底獣にむけてカウンターパンチと叫べ』

「か、カウンターパンチ！」
アントグラーに向けられた拳がマジンガーのロケットパンチのように発射されアントグラーの胴体を貫き戻ってくる

「お、おおー」

『次は手を肘の上辺りでひらきながらカウンタークロスと叫べ』

「よ、よし。カウンタークロス！」
肘についている赤い十字が肘から離れガイキングの手におさまる

『それは十字剣でな。そいつでやつを斬るんだ』

「や、やぁぁぁぁ！」
カウンタークロスでアントグラーを斬っていく

「はあっ！」
そのままカウンタークロスをアントグラーに突き刺す

『今だ！角を突き刺しボルトパライザーで決めろ！』

「うぉぉぉぉ！ボルトパライザァァァァ！」
ガイキングの角をアントグラーに突き刺し電流を流し込む
アントグラーはしばらく苦しんだ後ボロボロに崩れさった

「はあ、はあ、はあああ」
地面に座り込むガイキング。そこに数匹のゴルーグが落下してきた

『おい！なにをしている。はやく立て！』

「む、無理・・・・」襲い掛かるゴルーグ。ガイキングとの距離が縮まっていく

「うぅ・・・・」

「トマホォォォクブゥゥゥメラン！」
飛んできた斧がゴルーグを切り裂きゲッター炎の手元に戻る

「いつまで座ってやがる！とっとと立ち上がりやがれ！」

『（ダメだな。気絶してやがる・・・・・しかたない）』
突如分離するガイキング。そのまま大空魔竜に収納される

「なんだ？まあいいやる気がないなら俺達でやるだけだ。いくぞ！隼人！弁慶！」

「「おう！」」

「やる気まんまんだな竜馬。俺達もいくぞマジンガー」
マジンガーとゲッターがゴルーグ達を倒していく。その光景を大空

魔竜はじっと眺めていた

第3話炎の巨人　ガイキング（後書き）

目覚めた巨人ガイキング。しかしパイロットである海地はガイキングに乗ることを拒否する。そんな中、新たな地底獣が現れ源三を人質にとる。卑劣な手口に海地の怒りの炎が燃え上がる

次回『怒りの必殺魔球　ハイドロブレイザー』

ロボット及びパイロットの設定（前書き）

設定です

ロボット及びパイロットの設定

マジンガーＺ
全長：２１ｍ
重量：２２ｔ
武装
・ロケットパンチ
・アイアンカッター
・光子力ビーム
・ブレストファイヤー
・ルストハリケーン
・ミサイルパンチ
・ドリルミサイル
補足：兜　甲児の手によって作られたスーパーロボット。頭部にパイルダーがドッキングすることで動くようになる。装甲は超合金Ｚというもので作られておりかなり頑丈。動力は甲児が発見した光子力エネルギーということになっているが・・・・・

兜　力也
身長：１７５ｃｍ
体重：６７ｋｇ
年齢：１６
血液型：Ｂ
誕生日：９／２３
人物：マジンガーＺのパイロット。性格は淡泊。熱血という言葉が

あまり似合わない男。父からの最後のメッセージを聞きマジンガーに乗ることを決心する

ファイヤー号
ハリケーン号
マウンテン号
ゲッターチームが乗り込む戦闘機達。合体の仕方によって三つの姿になる

ゲッター炎
全長：３８ｍ
重量：２２０ｔ
武装
・ゲッタートマホーク（片刃）
・ゲッタースパイク
・ゲッタービーム
・ファイヤーウイング
補足
ファイヤー号、ハリケーン号、マウンテン号の順に合体して誕生するゲッターロボ第１の姿。空陸戦を得意としており背中のファイヤーウイングで自在に空を飛ぶ。メインパイロットが竜馬なことから荒い戦闘が多い

流　竜馬
身長：１８６ｃｍ
体重：７６ｋｇ
年齢：１７
血液型：Ｏ
誕生日：５／２８
人物：ファイヤー号及びゲッター炎のメインパイロット。不良のくせに皆勤賞をとる変わったやつ。喜怒哀楽が激しく、かなりおおざっぱな性格。人間離れした身体能力を持っている。隼人、弁慶とは幼なじみ

ゲッター嵐
全長：３８ｍ
重量：２００ｔ
武装
・ゲッタードリル
・ゲッターアーム
・プロペラウイング
補足
ハリケーン号、マウンテン号、ファイヤー号の順に合体して誕生するゲッターロボ第２の姿。陸上での高速戦闘を得意としており最高速度はマッハ３。両肩のプロペラウイングからはかなりの強風をおこすことができる

神　隼人
身長：１７９ｃｍ

体重：６５ｋｇ
年齢：１６
血液型：Ａ
誕生日：８／２５
人物：ハリケーン号及びゲッター嵐のメインパイロット。サッカー部に所属しており将来を期待されている。本人は学者になりたいのだがサッカー選手の父に言われしかたなくサッカーをしている。三人の中では常識的なほう

ゲッター山
全長：２０ｍ
重量：２５ｔ
武装
・ゲッターミサイル
・ゲッターレーザーカノン
・ミサイルストーム
補足
マウンテン号、ファイヤー号、ハリケーン号の順に合体して誕生するゲッターロボ第３の姿。火力はゲッターの中で最大。また水中戦も得意である。メインパイロットが弁慶なことから柔道技をよく戦闘に用いる

車　弁慶
身長：１６９ｃｍ
体重：８１ｋｇ
年齢：１６

血液型：Ｏ
誕生日：１０／２５
人物：マウンテン号及びゲッター山のメインパイロット。柔道部に所属しておりかなりの実力者。女好きなところがある。太めの体型が悩み

大空魔竜
全長：４００ｍ
重量：３８０００ｔ
武装
・ドラゴンカッター
・ミラクルドリル
・ジャイアントカッター
・その他ミサイルなど
補足
かつて地底の悪魔を封印した魔竜。顔はガイキングの胴体になる。体内にマジンガー達を収納可能。実は意思を持っていて喋ることができる

ガイキング
全長：５０ｍ
重量：２２０ｔ
武装
・デスパーサイト

・カウンターパンチ
・カウンタークロス
・キラーバイト
・ボルトパライザー
・ザウルガイザー
・ハイドロブレイザー
・フェイスオープン

補足

大空魔竜から発進したアームパーツ、レッグパーツ、フェイスパーツが合体することにより誕生するロボット。パイロットの心の炎をエネルギーとしておりパイロットが弱気なら弱く、強気なら強くなる。フェイスオープンを行うとパワーなどが一気に上昇するがそのぶんパイロットへの反動も強い

空竜宮　海地
身長：１６７ｃｍ
体重：５４ｋｇ
年齢：１５
血液型：Ａ
誕生日：１／２９
人物：ガイキングを動かすことができる正しき炎の持ち主。野球部期待の星であり魔球を投げることができる。大空魔竜とはいいコンビである

第４話　怒りの必殺魔球ハイドロブレイザー（前書き）

完成しました。第４話です

第４話　怒りの必殺魔球ハイドロブレイザー

兜家　研究室

「だーかーらー！俺は乗らないって言ってるだろ！」

「だから！ガイキングはお前にしか動かせないって言ってるだろ！」海地と隼人の言い争いが続いている。理由はいわずもがなガイキングのことである。あの後戦闘が終わり大空魔竜から海地が気絶していることを聞き（ちなみにこの時善三以外はかなり驚いていた）とりあえず明日にしようと解散。翌日になり回復した海地と話しをしたところガイキングには乗りたくないと言い出した。力也では優しく語りかけるだけ、竜馬では殴り合いに発展しかねない、弁慶では話がそれかねないということで隼人が説得することになったのだが乗らない、乗れ言い合いするだけで話がすすまないのである

「いい加減にせんか！お前にしかやつを倒すことはできないんだと言ったじゃろ！」

近くに座っていた源三が海地を叱る

「・・・・・・くそっ！」

少し黙り込んだ後部屋を飛び出す海地

「あ！待て「ほおっておけ」博士？」

止めようとした隼人を善三が止める

「すぐにわかるだろう。自分のやるべきことをな」

???
古びた神殿の奥。そこに地底の悪魔がいた
［にっくき大空魔竜。そしてガイキング。こんどこそ倒してくれるわ］
目の前に魔法陣が浮かび上がる
［ゆくのだ、地底獣スパイダス。地上の人間共を人質にとりガイキングを倒してこい］

戦艦オーランタン
その一室にキュラがいた
「キュラ様！フランケン様より新たな宇宙獣が届きました！」
部屋に部下らしき男が入ってくる。フランケンから宇宙獣が届いた

ことを知らせにきたらしい

「ほう。で、どんな宇宙獣なのだ？」

「メモによると名前はE・エプリオス。地球に生息するザリガニという生物を元に作った宇宙獣らしいです」

「ふむ。では早速地球にむかうとしよう。覚悟しろよ地球人共」

地球

海地は一人、神社へと続く道を歩いている

「海地くん？」

そんな海地に一人の女性が声をかける

「あ、早苗さん」

声をかけてきたのは神社の巫女をやっている磯崎　早苗だった

「どうしたの？元気ないみたいだけど」

「そ、そんなことないっすよ！俺はいつだって元気っすから！」

腕をぶんぶんと回し自分は元気だとアピールする海地

「嘘ね。顔に元気がないもの」

「うっ・・・・」

無理矢理作った笑顔を見抜かれる海地

「なにかあったの？」

「え、えっと。実は・・・・」

海地は早苗に自分の現状を話す

「俺、どうしたらいいのかわかんないんす。いきなりあんなのに乗らされて戦えって言われて。戦いたくなんかないし乗りたくもないけど俺にしかできないって言われて・・・・」

「別に海地くんのすきにすればいいと思うよ？」

「え？」

「だって海地くんは戦いたくないんでしょ？だったら戦わなければいいよ。地球を守ってるのは海地くんだけじゃないしね」

「そ、そうっすよね「でもね」え？」

「これだけは知っておいてほしいんだ。海地くんがガイキングに乗って戦ってくれたおかげで感謝してる人がいることをさ」

「感謝？俺に？」

「うん。もちろん私も感謝してるよ。この町を守ってくれてありが

とう」

「・・・・・・・」

思わぬ言葉に黙り込む海地

その時だった天空に巨大な魔法陣が現れ巨大な蜘蛛の怪物、スパイダスが現れた

「あ、あれは地底獣！」

スパイダスは口から網のようなものを吐き出し人々を捕まえていく

「あいつ、町のみんなを！」

「海地くん！早く逃げないと！」

その時海地は捕まった人間の中に知っている顔が一人いることに気づく。それは間違いなく祖父の源三だった

「じいちゃん！」

「え、源三さんがどうかしたの？」

「じいちゃんが捕まってる！」

「え！」

海地は迷った。助けにいくべきか、マジンガー達がくるまで待つか。

・・・・・いや。すでに答えはでていた

「海地くん！？」

海地は神社にむけて走り出す。そして神社につくと大声で叫んだ

「大空魔竜ぅぅぅ！」

すると神社の地面が二つに割れ下から大空魔竜がでてくる
海地はそのまま大空魔竜の顔へと飛び乗り、中へと入る

『どうした海地。戦う気になったのか？』

「違う。俺は戦おうと思って乗ったんじゃない。守りたいものを守るために乗ったんだ！アームパーツ、レッグパーツ、ゴー！フェイスパーツ、ゴー！」
ガイキングを構成する三機が飛び出す

「フォーメーションガイキング！コンバイィィィィン！」
三機が合体しガイキングが地上に降り立つ

「これでもくらいやがれ！カウンタァァァァパァァァンチ！」
放たれた拳に対し捕まえた人間達を盾のようにかまえるスパイダス

「な！」
急いで拳を戻す海地

「くそっ！きたない手使いやがって」
人質をとられ思うように動けないガイキング。そんなガイキングに対しスパイダスは糸を放ちガイキングの体を縛り上げる

「くっ！このっ！」
なんとか逃れようとするガイキング。それに対しスパイダスは縛る強さを変えて応戦する。デスパーサイトなどの光線技も人質に当たると思うと使えない

「てめぇ・・・・いいかげんにしやがれぇぇぇぇ！」
海地の怒りが頂点に達するとガイキングの体から炎が吹き出し糸を

燃やしてしまう。海地はガイキングの手の平に炎を集中、圧縮し火球を作り出す

「必殺魔球・・・・」
投球の構えをとるガイキング

「ハイドロォォォブレイザァァァァ！」
放たれる火球。スパイダスは火球を防ごうと人質達を真正面に構えるが

『ギャアアア！』
火球は大きくカーブを描き人質を避け、スパイダスの胴体を貫いたその衝撃により解放される人質達。ガイキングはカウンターパンチを使い人質達を回収する
ボロボロに崩れさるスパイダス

「ふぅ～」
人質達を地上に降ろし一息つく海地。その時
ズズーン！
空からザリガニのような怪物が降ってきた。宇宙獣E・エプリオスだ

「くそっ、まだいやがったのか」

『・・・・・いや、こいつは地底獣とは違う。別物だ』

「チェェェェンジ！ゲッタァァァァ炎！」

「マジィィィンゴォォォォ！パイルダァァァァァオォォォォン！」
ガイキングの両隣にマジンガーとゲッターが降り立つ

「よう。やっとやる気になったみてえだな」

「勘違いしないでください先輩。俺は自分のしたいことをやるだけです」

「二人共、無駄話は終わりだ。くるぞ！」
三機に襲い掛かるエプリオス。周りからは敵の戦闘機達がエプリオスを援護する

「雑魚共は俺に任せろ！ブレストォォォファイヤァァァァ！」
マジンガーの胸部の放熱板から発せられた熱線が戦闘機達をドロドロに溶かす

「しっゃあ！いくぜ！ゲッタァァァトマホォォォォォク！」

「カウンタークロス！」
ゲッタートマホークとカウンタークロスをそれぞれ構えエプリオスへとむかっていく
エプリオスへとそれぞれの武器を振り下ろすがエプリオスのハサミにより止められる

「「おらぁぁぁぁぁ！」」
それにたいし力任せにハサミごと腕を切り裂く二人

「これでぇ！」

「終わりだぁ！」
ゲッターは空へと飛び上がりゲッタービームを放つ
ガイキングは地上から目からの光線、デスパーサイトを放つ
二つの光線はエプリオスに直撃。エプリオスはしばらく苦しんだあ

とに爆発した

「はっ！ざまぁみやがれ！」

兜家

頭に大きなタンコブができている海地とそんな海地の前に仁王立ちしている源三

「・・・・・で、戦う気になったんじゃな」

「・・・・ああ」

それならよいといいながらみんなに向き直る源三

「この馬鹿をよろしく頼みます」

深く頭を下げる源三

「まかせな。ちゃんとしごいてやるからよ」

代表で答える竜馬

今ここに三体の巨人が集結した

彼らは地球の危機を救うことができるのか？

序章　完

第４話　怒りの必殺魔球ハイドロブレイザー（後書き）

はるか昔。この地球を狙う者と守る者がいた。守る者は狙う者達を封印するも復活を考え自身も長き眠りについた

そして現代、恐れていたことがおこる

次回『復活の邪魔大王国』

第5話　復活の邪魔大王国（前書き）

お待たせしました。第5話です

第5話　復活の邪魔大王国

地底獣の襲撃、海地の決心から数日がたった
あれから目立った襲撃はなく人々はまあまあ平和な生活を送っていた
そんな時、鹿児島のほうで謎の遺跡が発見された。学者達は新たな文明の発見ではと喜んだ。・・・・・・・・・・・・一人の学者をのぞいては

ある家のある部屋に二人の男がむかいあっている

「すまない××。あの遺跡が見つかってしまった」

「あやまることはないですよ父さん。いつか見つかるはずだったんです。幸いなことに俺もここまで成長できましたしパーツも完成しました。十分やつらを迎え撃つことができます」

「だが、やはり彼らにも話すぐらいはしたほうがいいのではないか？彼らなら手伝うぐらいは・・・・」

「父さん。これは俺が蒔いてしまった種です。俺が解決しなければならないんです」
そう俺がと自分に言い聞かせるかのように呟く男。今、地球に新たな敵がせまっていた

力也はめずらしく一人で学校にむかっていた
そこでふと思い出す
「（そういや最近、宙先輩と会ってないな）」
ゴルーグや宇宙獣、地底獣達と戦っていたためにいろいろとお世話になっている先輩、司馬　宙と最近会っていない。と、そんなことを考えているといつのまにか近くにいた美香が抱き着いてきた

「おっはよー力也！どうしたの？なんかテンション低いよ？」

「お前がテンション高いだけだろ。とっとと離れろ」
力也は美香の額を指で小突く

「む～。あ、そういや知ってる？朝のニュースでさ」

「謎の遺跡が発見されたってやつだろ。知ってる」
美香の前だからこそ平静を装っているが。彼は得体の知れない恐怖を感じていた。朝のニュースで見た遺跡から感じ取った恐怖。この恐怖は力也以外の者も感じていた

流天文台の地下

「よう竜馬。お前がサボりとは珍しいな」
ファイヤー号の前に立つ竜馬に隼人が話しかける

「ん、隼人か」
いつもの竜馬とは違う反応に隼人は違和感ではなく確信を抱いた

「やっぱりお前もか」

「お前もかってことはお前も感じたんだな。あの遺跡を見て」

「ああ。あの遺跡は異常だ。あれはなにかある。得体の知れないなにかが」
二人はそこで喋るのをやめ自分のマシンを見上げる。そこに弁慶もやってきてマシンを見上げる。三人の間に会話はないが心は一つだった。なにがなんでも地球を守る・・・・と

魔竜神社の地下
そこで海地は大空魔竜を見上げていた

『・・・・・学校に行かなくていいのか？』

「いや、なんだか今日は嫌な予感がしてさ。ここを離れないほうがいいような。そんな感じ」

『ふむ。そういえば昨日、妙な邪気を感じたのだが・・・・・もしかしたら関係しているかもしれんな』

「・・・・・・なにもなければいいんだけど」
海地はそう呟かずにはいられなかった

例の謎の遺跡の上空を闇が覆う

『くくく。愚かな人間が。あっさりと封印をときおったわ』
闇はだんだんと人の形になっていき、最終的には一人の女性になる

『しかしジーグのやつめ。体と魂を別々に封印しおったな。はやく体を取り戻さねば』
女性の体は陽炎のようにゆらゆらとゆれている。女性は再び闇に戻るとある方向へと飛んでいく。自分の肉体が封印された遺跡へと

大門市

力也は教室の窓からふと空を見る。空は黒い雲で覆われ、今にも雨がふりそうだ
「傘、忘れた」
そんなことを呟く力也。しばらく空を眺めていると、ある異変に気づく。空を覆う雲がさらに黒いなにかで覆われていく。そしてその時はきた
巨大な埴輪の怪物がおちてくる。どの埴輪も同じような鎧を着込み、武器を持ち、まるで兵士のような姿をしている
「な、なんだあいつら！くそっ」
力也は急いで教室を飛び出す。力也が腕時計のボタンを押すと兜家からホバーパイルダーが飛んできた。ホバーパイルダーに乗り込む力也
流天文台では三人がゲットマシンを発進させ、魔竜神社では海地が大空魔竜を発進させる
「マジィィィィン、ゴォォォォ！パイルダァァァァォォォォォン！」
「チェェェェンジ！ゲッタァァァァ炎！」
「アームパーツ、レッグパーツゴー！フェイスパーツゴー！フォーメーションガイキング！コォォォォンバイィィィィン！」
大地に降り立つ三体の巨人
「うおぉぉぉ！ロケットパァァァンチ！」
マジンガーから発射された拳が埴輪を貫く。一瞬動きが止まるがすぐに穴が塞がれ活動を再開する
「こいつら再生するのか！？」

「なら、再生できないぐらいボロボロにするまでだ！くらえ！ゲッタァァァァビィィィィィム！」
ゲッター炎から放たれたビームが埴輪の一体を消し去る。だが別の埴輪が光線のようなものを放ちゲッター炎を攻撃する

「うおぉぉぉ！？」

「先輩！このっ、ボルトパライザァァァァ！」ガイキングはゲッター炎を攻撃した埴輪に角を突き刺し電流を流し込む。埴輪はボロボロに崩れさるも、すぐに別の埴輪が現れ攻撃を仕掛けてくる

「くそっ、これじゃあきりがねえぞ」

「こんにゃろ、ブレストッ、ファイヤァァァァ！」
マジンガーから放たれた熱線が埴輪達を焼き払っていく

「まて力也！それじゃあ周りにも被害がでる！」
そのまま回転し周りの敵も焼き払おうとする力也だが竜馬に止められる

「くそっ。じゃあどうするんだよ！こいつら数が多すぎるぞ！」
そのときマジンガーの横を戦闘機が通り過ぎる。戦闘機の上には妙な姿をした人間？が乗っている

「鋼鉄ゥジィィィグ！」人間？は戦闘機から飛び降りると両拳を打ち合わせ、巨大な頭へと姿を変える

「な、なんだあれ！？」
力也達が驚いていると戦闘機から腕や足などのロボットのパーツが発射されロボットのボディを形成する。次にボディへ先程の巨大な

頭が合体する
「ビルドォォォアァァァァップ！」
巨人は雄叫びをあげながらポーズをとる
「聞け！邪魔大王国の兵士共！このジーグがいるかぎり貴様らの好きにはさせん！いくぞ、ダイナマイトパンチ！」
ジーグの両腕が発射され埴輪達を貫いていく。マジンガーの時とは違いなぜか再生しない埴輪達はそのまま土のようにくずれさる
「なんであいつら再生しないんだ？」

「恐らくあのジーグとやらはあの埴輪共の心臓のようなものを攻撃しているのだろうな。だとしたら、あのジーグとやらはそうとう強いぞ」
竜馬の疑問に隼人が答える。そのとき天空から今度は岩のようなゴツゴツとした体の怪物が現れる
「今度はハニワ幻人か。ヒミカも諦めが悪いようだな。なら貴様の全てを叩き潰すまでだ！ジーグビィィィィム！」
ジーグの両目から光線が放たれハニワ幻人を撃ち抜く
「うおぉぉぉ！ダイナマイトキィィィィック！」
大きく飛び上がり跳び蹴りを喰らわせる。吹き飛ぶハニワ幻人
「はあぁぁぁ！」

ジーグが腕を大きく広げると胸から光のロープのようなものがでてハニワ幻人を縛り上げ引き寄せる

「ジーグブリーカァァァァ！死ねぇぇぇぇ！」
そのまま腕でハニワ幻人を抱きしめるように締め上げ胴体をひきちぎる

「さぁ！次はどいつだ！」
ハニワ幻人を倒すとジーグは空にむかってどなる。すると空を覆っていた黒いなにかは消え元の空に戻る

「ふん、逃げたか」
帰ろうとするジーグを引き止める力也

「待ってくれ！あんた、あいつらのこと知ってるんだろ？俺達に教えてくれよ！」

「これは俺の戦いだ。貴様らが知る必要はない」
それだけいうとジーグは元の妙な姿に戻り、戦闘機に飛び乗る。戦闘機はパーツを回収しどこかへと飛び去っていった

「ジーグにあいつら。いったい何者なんだ・・・・」
力也は呆然としながら呟いた

第5話　復活の邪魔大王国（後書き）

現れた新たな敵。そして謎の巨人、ジーグ。新たな敵に立ち向かうためマジンガーZの強化が始まる。その時町に新種のゴルーグが

次回『マジンガーZ強化計画』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2572u/

ＯＤＧ Original Dynamic Generation

2011年11月27日18時45分発行